

〔第24回 学術集会シンポジウム1〕

語りが生み出す看護実践の知

東京大学大学院医学系研究科

山本 則子

私たちは「日本の現場発看護学」構築のための「ケアの意味を見つめる事例研究」の方法論開発に取り組んでいる。ここでは事例研究を試行する中で感じてきたことを述べる。

1. 対人の実践である看護の知を伝えるためには事例研究が必須

看護は個人対個人が対峙して相互作用することで成立する対人の実践である。そこには、「文脈に埋め込まれた展開」「要素に分解できない全体性」「まったく同じ状況は二度と起きない一回性」といった性質がある。このような性質を持つ対人の実践には、事例研究でなければ表現できない知の形がある。

2. 看護には「語り」でなければ表現できないが実践が含まれる

対人の実践である看護の知を伝える際に、概念や理論という形で文脈をそぎ落としてしまうと、日々のリアリティをもった全体像を伝えることができない。改めて振り返り経験に自由に言葉をつける「語り」でなければ言葉にならない実践があるように思われる。文字にする際にも、思いつくままなぐり書きのように書いたものに生き生きとした実践が表れていることがあり、それを大切にこそ事例の中心テーマを浮かび上がらせることができるように思う。

3. 「対話」が浮かび上がらせる実践の意味がある

実践の瞬間には、その意味についての論理的な説明が常に意識されているわけではない。エキスパートの実践ほど、複雑な文脈を感覚的に統合して捉え、行動が直感的・瞬間的になる。そのような看護

実践について、実践の意味を他者と共有可能な形にするには、熱心に質問されたり、一生懸命他者に伝えるために考えて言葉にするという「対話」が重要に思われる。「どうしてこの事例を発表しようと思ったのか?」「そこで何が起きたのか?」「そのような行為の意図はなんだったのか?」などと「問われ語り」をすることで、それまで意識化して来なかった実践の意味が意識化・共有できるようである。

4. 看護実践と事例研究の実践には不思議な相似がある

「ケアの意味を見つめる事例研究」では、自由・対等で多様な文脈を持つ他者や過去の自己との間の「対話」が繰り返されており、これが実践知の生成過程として重要な一部分になっている。これは昨今話題になっている当事者研究に呼応しているように見える。また、「対話」によって事例提供者の自分の経験に関する理解が更新されるとともに対話メンバーの経験の意味も更新され、メンバー間での共通理解によって「語り」が共有可能で一定の普遍性を持った「知見」として質的に転換されるようである。さらに、殊に看護という実践の事例研究では、事例提供者と対話メンバーや読者との間に生まれる共通理解が、ちょうど、看護師が患者とのやりとりの中で共通理解（共感）を生み出すことの重要性とも呼応するように見える。この相似が、このような研究方法による看護実践の知の創造の必然性を物語っているように思われてならない。